随筆

春霖の日の城山

日向市
賛助会員　狩生秋仙

五時半に目が覚めたが、前夜十二時過ぎまで飲んだ酒は、まだ胃の腑のどこかに残っている様で、頭も爽快という状態ではない。耳をすますと、雨が降っている気配である。右横に寝ていた義弟は起き出ているが、娘夫婦はまだ熟睡している。

無理もないと思った。朝十時に家を出て、国道十号線を七飼迄、そこからは飼大橋を渡って五十七号線を竹田へ向ったのだが、大野町田中を過ぎると未舗装道路で、所々拡張工事中であった。そんな所の路面は「道路」と云えるようなものではなかった。娘のハンドルではどうにも不安なので、私が代って運転したが、結局竹田市役所に着いた時には、予定を四十分程過ぎていた。悪路を予測しなかった結果である。

市長に会った後、教え子を伴なって遅い昼食をすませた。それから玉来の上水道迄行って歌碑の写真を撮った後、両城址に車を廻したりして、再度の訪竹を約して竹田を出た時には、すでに五時を幾分廻っていた。

竹田からは私が助手席に坐って、婿にハンドルを握らせた。大野町迄の悪路が嫌だったから、三重から野津へ出ようと思った為である。そして佐伯の妹の家に着いたのが七時過ぎであった。その疲れが娘達に残っているのだろうと思った。

私は六時に床を出て院面所に行った。

「どうな、疲れたじゃろう——」

と、茶を飲んでいた義弟が云う。

「通り馴れた道じゃから、それ程でもねえが、娘達は初めてだから、少々参ったかも知れんな」

と私は答えた。妹がお茶を持って来た。

「そっちの瓶ふき一杯呉れ」

と云うと、

「これは空よ。ビールを上げようか」

と云う。

「それそれ、それこそ望むところじゃ」

私はコップ一杯を一息に飲み干し、二杯目からゆっくりと飲んだ。三本目の栓を抜いた時、娘夫婦が起きて来た。窓から見ると、小雨降ったり降っている。

皆が朝食をすましても、私はまだ三本目のビールを飲んでいた。

「城山へは車で登れるじゃろ？」

「登れますよ。しかし、今朝はあんたが運転せん方がええな。」

七降りになっては困るから、早いとこ出かけようと、私は寝巻を着換え袴を穿いた。そしてメモ帳とカメラを持って玄関に出ると、助手席に坐った。娘がハンドルを持った。

「真直ぐ——橋を渡って真直ぐ——左へ——左へ——これからが登りだ——」

娘も婿も、城山は初めてである。登りになって二十メートル程行くと、

「私じゃとても踏み込めないから代ってよ」

と、車を停めて言った。

「サイドブレーキをかけるんだ。――なる程、これは圭子じゃ無理だな。交代しなさい」

僕が代ってハンドルを握る。勾配は思ったより急だし、小さなカーブが多くて容易ではない。やっとのことで駐車場みたいな広場に出て停車する。車を降りた時、雨は大粒となった。私は洋傘を拡げ作ら、城址へ登った。

独歩碑は、予想していた位置に建っていた。先づ何よりこれを撮らねばならない。私は傘を娘に渡して、カメラのキャップを外し、ファインダーを覗いたが、ピールのせいだろうか、どうにもピントが合わない。

「俺は酔っとるのかな」

と云ったら、

「貸してごらんなさい」

と娘が云う。私は傘と取り換えた。位置を変えて数枚撮ってから、また下萌えの新芽も見え始め、冬枯れの草を踏んで歩き廻った。雨は益々大降りとなった。

どう見ても、老松の数が少ない様に思えてならない。城壁の下の雑木は伐り払われて、綺麗に手入れは行き届いているが、少年の頃遊んだ城址と、何か違った感じがしてならない。思えば無理もないことだ。約四十年の断層がある事を私は忘れていたのだ。

瞰下す市街にしても随分違っている。池般橋の位置も、埋め立てられて人家で一ぱいになっている中川一帯も、過去の追憶につながる何物も無いのである。ただ離の連山と、湾内の島々のみが、忘却の彼方から少年の日の思い出を蘇らせてくれるのである。

本降りとなった城址ではどうしようもない。私は車に戻るとまた助手席に坐った。序に紀州の墓を撮ろうと、養賢寺の方へ車を廻す。

「私は和服で来た事を悔いた。おまけにフイルムは無くなっている。ハーフカメラはどうしたと聞くと、叔母さんとこに置いて来たという。せめて墓石の大きさでも測っておこうと、カメラの革紐を外した。それを紀州の墓の正面、側面、高さに当てて印しをつけた。そして側面に刻んである文章をメモした。

風が出てきて、草履も足袋も、袴の裾まで濡れてしまった。都合では松浦迄行く予定であったが、こんなに濡れては動きがとれない。断念して妹の家へ引返した。

正午前から義弟相手に飲み作ら「源さじ」の事を尋ねたが、何も知らないのが当然であろう。紀州の墓と建てた田吹女史についても、歌人としての女史の名は知っていたが、墓を建てた経緯は判りようが無かった。

今年の書初めに、生れて初めて私は半折に水墨画を描いた。画を描いた理由は、素找き探すのが面倒だったからである。だから使った筆も、純羊毛の長鋒一管だけで、七つの山を描いてみたのである。それが「画」といえるかどうか、論外な作品である事は確である。それでも直ぐに、竹田の表具屋に送って、表装して貰ったのである。

表装の出来た半折を掛けてみると、上辺の余白がどうにも気になって仕方がない。不図私は両の目に登った城山と思い出した。早速墨を磨って、その余白に拙い字を書き込んだ。

不留斜登熊山仁向悲天云不故止奈之
婦流左登乃夜万波
那津加志支可奈

啄木の歌を万葉仮名で書いたのである。

一昨日から降り続いている雨は、今日も晴れそうにない。気圧配置を見ると、この様子では（以下12ページ上段の終りにつづく）

（音楽科主！ム）が出場することになっていたので、赴任した日から本矢君と練習を始めました。この チーム は五年生の頃からよく練習していて上手な児童が多く、その中でも投手の扶開若（当時の佐伯高等女学校長扶開俊雄氏の御子息）は名投手でした。五月に大分市で大分新聞社（現在の大分合同新聞社）主催で東九州少年野球大会が開催され、我が B 組チーム は運よく優勝し、来る八月に宝塚で行われる全国大会に東九州代表として出場することになりました。それから六月、七月と暑さにめげず毎日毎日猛練習を重ねました。阿南卓先生が毎日お出でになり指導して下さいました。高妻校長をはじめ皆んなの先生方の激励に選手たちは一生懸命に練習して、五月の頃とは見違える程ど上達しました。よく先生チーム と練習試合をしましたが、その時此度高妻校長が投手と買って出ていました。（実は投手にしないと気嫌が悪かったのです）。私は毎日の練習で急に疲労（顔面神経まひ）にかかり、とうとう大会には選手に付添って行けなくなって、高妻校長自ら選手と引率し、阿南先生が監督となって遠征しましたが、武運拙なく第一戦で敗退してしまいました。

十五年度の新学期を迎え職員一同張切っていましたが、六月高妻校長が急に退職して、北海部郡から佐藤喜一校長を迎えました。私はそれから昭和三年三月まで佐藤校長の下に勤務して大島小学校へ転任しました。

（終）

（28ページ下段より（つづき））

春霞となるかもしれぬ。そしたら当分、雨の城山を訪れる人もいないだろうと思ったりしている。

（住所　宮崎県日向市美々津町）

（7ページ下段より（つづく））

先述した弥生町小倉の慈崖塔造立年次、康永四年は北朝年号で、この辺りが北朝色豊かな頃のものである。これらは南北朝争乱の消長を物語り、この平和な佐伯地方もかつて争乱の渦中にあったことを示している。南朝年号といい、北朝年号と謂う、当時の争乱の名残りを留め、更に権力の推移を物語る貴重なものであろうか。（終）

（住所　南海部郡弥生町大字江良）

朝報。――三の丸の御殿、移築への動きが……。

かねてからその取壊しが決定的であった三の丸の御殿が、市内某地区の切なる要望により、船頭町河畔の市有埋立地に、移築・保存の動きを見せている。寄びにたえない。

願わくば今の御殿の姿を、出来るだけそのままに移して、後世にのこされるように。

研究

佐伯の港はどんな働きをしているか

――主として水揚の流通について――

大分県立佐伯豊南高等学校
教諭・同校郷土誌クラブ顧問
本会会員　市野瀬　仁

第二章　佐伯港

第二節　その社会的環境（つづき）